

○例えば、限られた時間の中で決められたプログラムの授業をする際に生徒が 20 人(定型 15/発達障害 5)居て、一人一人と話す時間がない状況、かつ授業の間に生徒があちこちで様々なアクションを起こしている。でも、一人一人に声をかけられない。この場合、井上先生はどのように一人一人のアクションに向き合いますか？

ご質問ありがとうございます。

現場での差し迫った難しい状況の中、孤軍奮闘されているお姿が目には浮かぶようです。このような状況下でお仕事をされている教職員の方には本当に頭が下がります。国や社会、ご家族が求める理想の教育現場と現実との間にはまだまだ大きな隔たりがありますよね。現実問題としてそのような状況になってしまっただけでの対応は難しいと思います。

今回の講演でも話しましたが、多様性を認めない今の学校や社会では、定型発達児と発達障害児が共に学ぶインクルーシブ教育の実現は難しいと感じています。例えば校則に見られるスカート丈や髪型、髪色、服装等の細かい規定は、これからの教育にとっては大きな障壁となります。日本ではアルビノの子に髪の毛を黒く染めてくるように指導しているところが大半です。本人の為と言うことですが、それは本人の尊厳を著しく損なう態度です。

白血病の少年が放射線治療の副作用で髪の毛がなくなってしまった時に、クラスメイトが話し合ってみんなで頭髪を剃ったという有名な話がありますが、こういったあり方が大切だと私は思います。しかし、それにはそれが許される環境と周囲の理解が必要なのです。

そういった意味で今回のご質問のケースは本当に難しいと思うのです。授業をする以前に学校としての明確な方針、教職員の知識、保護者の理解が必要です。そして、子どもたちには発達障害や知的障害に対しての勉強会、そして共に生きていくためにどうしたらよいかということに対して、共に考える時間を持つことが重要です。

当然、差別や偏見が一瞬で消えるとは思いません。しかしそれらの行動が徐々に、しかし確実に、関わる人たちの考え方や人生そのものをより良い方向へ変えていくことは確かです。その結果、それまで以前とは、授業の様子はがらりと変わるはずです。

ご質問者様にとって差し迫った問題で、「今日どうしたら？」という問いには一切その答えになっていませんね。すみません！

今後、教職員の先生方が定期的に現状報告や意見交換をすることで光は見えてくるのではないのでしょうか。今ある、この問題に対して声を上げて話し合っていきましょう！

人間力認定協会でも広く意見交換会を実施していく予定ですので是非ご参加ください。

○山村留学で親元を離れて暮らしている子供が、死にたいと、時々相談してきます。以前全く別の自閉症障害の講演会では死に、こだわらせない為に否定も肯定もしない。とお聞きしたのですが井上代表はどのようにお考えになりますでしょうか…。

ご質問ありがとうございます。

とてもつらくて、悲しくて、苦しいことですね。

我が子から「死にたい」と言われた時の親の気持ちは筆舌に尽くしがたいものがあります。その子に肉体的障害や精神的障害がある場合は特に胸が締め付けられます。できるものならすべて代わってあげたい。でもそれは不可能な事、激しい無力感に苛まれますよね。

今回の講演では「非認知能力と幸福論」について話しましたが、人生の幸福を考える時、病气や死と向き合うことを避けては通れません。生きることや死ぬことの意味を考えることを「死生観」と言います。私は20代の頃より誰よりも死を意識して生きてきました。私の話の中に「死亡統計」等の話がよく出てくるのはそのためです。

日本人は古くから死生観を語りたがりません。恐らくそれは日本が神社に象徴される「神道」の国だからでしょう。神道では死は「忌み嫌うもの」なのです。仏教が伝来してくるまでは人が死ぬと、その亡骸を草むらに放置したり、そこで燃やしたりしました。仏教が伝来してからも葬式から帰って来ると塩をまいて身を清めますよね。これらの行為もその現れです。そのようなことから、誰もが「よくわからない死」を、必要以上に恐れているのだと思います。「恐れているなら死にたいとは思わないのでは？」と思うかもしれませんがそれは逆です。死の恐怖から完全に解放してくれるものは「死」そのものなのです。死んだら、「死ぬ」という恐怖に襲われることはありませんから。

だから、私は子どもに「死にたい」と言われた時、この子は「生きたい」と言う思いを、信頼している「私」に訴えているのだと考えて、一緒に「幸福なる人生」について語り合います。死はすべての人に確実に訪れます。だから「急ぐ必要はない。その時までの短い時間を楽しもう！」と言う話をします。

お釈迦様は「この世は空（くう）である。あなたも空（くう）であり、私もまた空（くう）である」と説かれました。（ちなみに私はそれほど敬虔な仏教徒ではありません。キリスト教もイスラム教も一つの哲学として好きなだけです）その意味は「あなたは100年前この世に存在していなかったし、100年後もまた存在していないのです。今この瞬間の存在は幻にしかすぎない」と言っているのです。このお釈迦様の死生観に、私はこれまで何度も救われました。その子が「生きたい」と言う思いで、「幸せ」や「夢」について笑顔で語る日が、一日も早く来ることを心よりお祈りしております。

○愛着の形成と非認知能力は関係性があるように思われますが、愛着の形成が上手くできずにきたお子さんに対しての支援で、何かアドバイスがあればお願いします。また、非認知能力の向上についても年齢的な臨界期のようなものはあるのでしょうか。

ご質問ありがとうございます。

たくさん勉強されている方なのでしょうね。大変難しい質問だと思います。

ご存知の通り、愛着は生まれた環境の中で、特に母親など身近な人たちを介して育まれるものです。その点、発育環境によってもたらされる非認知能力と、とても似ていると言えるでしょう。この世に誕生して、特定の他者（通常は母親）から得られる「愛着」は人間としての基本的な「愛」を学びますし、その愛が他者とのコミュニケーションの根底にあるということは大変重要であると推察できます。ご質問のように、様々な要因で、愛着がうまく形成できないまま成長し、そのことが原因で様々な問題を引き起こす例も少なくありません。しかし、心理学が示すように人間の可能性は無限です。どのような環境であっても、時間がかかっても愛着の形成は可能だと私は信じています。誰かに愛され、必要とされていることに、本人が気付くことが出来ればそれは問題ではなくなるはずです。

子どもたちは幼児期に「愛着」を学び、学校や社会に出て「社会性」を学びます。愛着が育たないまま、「社会性」ばかりを教えると、この世はとても殺伐とした世界に感じるはずで、何かができると価値がある。何かを持っていると価値がある。そうでなければ価値がないのだという考え方になってしまいます。何も出来なくても、何も持っていなくても、あなたの存在自体が尊く、価値があるのだという実感を与えることが必要です。しかし、この当たり前のことが、今の日本の社会ではとても難しく、得難いように感じてしまうのではないのでしょうか。それこそが今の日本の教育の問題点だと私は考えています。日本が自殺大国であることや、ひきこもり、いじめが多いのも、このような価値観が支配しているせいではないのでしょうか。その点では、ご質問にあった、その子だけの問題ではありませんね。

話は逸れてしまいましたが、「愛着」が不足しているなと感じた時は、叱ったり、ルールを押し付けたりすることを少しやめて、あなたはとても大切な存在であるという話をしてあげることだと思います。当然、教職員としてできる事には限界はあるかもしれませんが、そのようなことを真剣に話し合う時間を持つことで、「自分は大切にされている」と感じ、変化があるかもしれません。

あと、非認知能力の向上について「臨界期」はあるのですか？というご質問ですが、「幸福になる期限」と考えると、死の瞬間に「生まれてきてよかった」と一瞬でも思えれば、その瞬間に非認知能力は向上したと言えるのではないのでしょうか。その点では、まさしく「生の臨界点」が「非認知能力の臨界点」だと思います。

○質問ではありませんが、まずはご著書を読ませて頂きたいと思います。

ありがとうございます。

しかし、この本は値段が高いし、内容もあまりたいしたことないので期待しないでください。

Kindle アンリミテッドで各章は無料提供していますのでまずはこちらで 5 章まで読めば十分です。6 章以降は余談ですから（笑）参考までに